

### 4-4-3.薩南諸島における唐辛子の利用—薬用に注目して—

山本 宗立

## Medicinal Usage of Chili Peppers in the Satsunan Islands

YAMAMOTO Sota

鹿児島大学国際島嶼教育研究センター

*International Center for Island Studies, Kagoshima University*

#### 要旨

薩南諸島における唐辛子の薬としての利用について現地調査および文献調査を行った。その結果、種子島や屋久島、三島村では唐辛子の薬用例をほとんど得られなかった。それに対し、奄美群島では腹痛や痙攣、風邪などに唐辛子が利用されていた。特に、腹痛時に唐辛子入りの卵焼きを食べるとよいという事例は、奄美群島と沖縄県のみで確認されたため、奄美・沖縄に固有ともいえる用法の可能性はある。

唐辛子は中南米原産のナス科植物で、日本で栽培・利用されている唐辛子のほとんどが植物学的にトウガラシ (*Capsicum annuum*) に属す。しかし、薩南諸島の一部地域ではトウガラシとは別種のキダチトウガラシ (*C. frutescens*) も栽培されており、その果実は非常に辛く、独特の香りや風味をもつ。香辛料や野菜として利用される唐辛子だが、実は世界中で薬としても利用されてきた。薩南諸島も例外ではないのだが、唐辛子の薬としての利用はあまり注目されてこなかった。飛び石状に続く薩南諸島の島々において、唐辛子の薬用に関する伝統知に連続性があるのか、固有性が高いのか、非常に興味深い。そこで、薩南諸島における唐辛子の薬としての利用について現地調査および文献調査を行った。

種子島および屋久島については、『西之表市百年史』、『中種子町郷土誌』、『増田の民俗誌』、『わたしたちの種子島 民俗編』、『南種子町郷土誌』、『屋久町郷土誌第一卷～第三卷』、『屋久島麦生の民俗誌 II』、『屋久町の民俗 II』に記載されている薬用植物を調査したが、唐辛子の薬用に関する記載は見つからなかった。ただし、『屋久町郷土誌第三卷』の安房村の項に「打ち身のとき、トイシ草とタマゴ・メリケンコ・焼酎・コショウなど七品をすり合わせて患部につける」とあった。この「コショウ」が文献からは胡椒なのか唐辛子なのか半別がつかなかったが、屋久島では唐辛子のことを「こーしょう」などと呼ぶ場合があるため、唐辛子である可能性も否めない。また、三島村の竹島・硫黄島・黒島において、2016年に唐辛子の利用に関する調査を行ったが、残念ながら薬用の情報を得られなかった。

奄美大島では「はらぐすりになる、焼酎に果実をつけておき、その汁を飲む」や「腹痛時、薬を飲むようにして果実を飲む」のように、唐辛子を腹痛の薬として利用していた。また、「唐辛子の果実を蒸留酒に漬けておき、足が痙攣するとき、その液体を患部に塗る」や「果

実を焼酎に漬けておき、その液体を飲むと風邪薬になる」などの事例も得られた。徳之島では胃病のときに果実を焼酎に漬けたものが利用されたり、腹痛時に唐辛子入り卵焼きが食されたりする。沖永良部島でもワタヤミ（腹痛）の時には「フシュ（からし）を食べればよい」との情報がある。与論島では「健胃に食前粉末を飲む」、「神経痛に瓶に酒を入れ20日以上」、「湿布」などのように唐辛子が利用されるようだ。

『沖縄民俗薬用動植物誌』によると、沖縄島では下痢・歯痛・頭痛・咳・腹痛・二日酔に、久米島では結膜炎・破傷風に、大神島では湿布・肺病に、石垣島では破傷風に、果実が薬として利用される。奄美群島との共通点としては、「酒」（蒸留酒と思われる）に果実を漬けて薬として利用する点、そして腹痛時に果実を利用する点である。「唐辛子と卵を混ぜて、焼いて食べる」という用法が徳之島と全く同じであったのは、特筆すべきことだろう。

台湾の台湾原住民族は、胸痛・出産・食欲不振・腹痛・二日酔・蛇咬傷に唐辛子の果実を薬として用いる。腹痛に果実を用いる点、蒸留酒に果実を漬けて薬として利用する点が奄美群島・沖縄県と共通している。一方、一部の台湾原住民族は唐辛子の根を腹痛の薬として利用しており、主に果実のみを薬に用いる奄美群島や沖縄県とは異なる。フィリピンのバタン諸島では、果実が関節痛や傷口の薬に用いられる。ミクロネシア連邦では、果実を関節痛・眼病・駆虫・下痢・歯痛・頭痛・鼻水に、種子を歯痛に、葉（花芽や未熟な果実を含む）を眼病・傷口・止血・耳垂れに、花を難産に、根を傷口に用いる。果実だけではなく、種子、葉、花、根など、あらゆる部位を利用している点が奄美群島とは大きく異なる。

薩南諸島（特に奄美群島）における唐辛子の薬としての利用の特徴を周辺地域と比較してまとめてみたい。腹痛時に果実を丸のみにする、果実を食べるとよい、のような利用例は、アジア・オセアニアの幅広い地域で知られている。唐辛子の辛味成分であるカプサイシン類には抗菌・鎮痛作用がある。各地で下痢や歯痛に利用されているのも、科学知ではなく経験知によって唐辛子に抗菌・鎮痛作用があることを見出したのかもしれない。

唐辛子の果実を蒸留酒に漬けて薬とする事例は、奄美群島、沖縄県、台湾で確認された。中国では生薬を酒に漬けた薬酒が古くから利用されており、日本でも江戸時代の本草学の書籍に薬酒が散見される。唐辛子の果実を蒸留酒に漬けて薬として利用するのは、本草学の影響を受けている可能性がある。

腹痛時に唐辛子入りの卵焼きを食べるとよいという事例は、奄美群島と沖縄県のみで確認されたため、奄美・沖縄に固有ともいえる用法なのかもしれない。ただし、非常に用法が似ているため、片方の地域からもう一方の地域へ利用方法が伝わった可能性を考えておく必要があるだろう。

## 参考文献

- 山本宗立 2016. 薩南諸島の唐辛子—文化的側面に着目して—. 『鹿児島島の島々—文化と社会・産業・自然—』（高宮広土・河合 溪・桑原季雄編），72-83, 南方新社, 鹿児島.
- 山本宗立 2018. 薬としての唐辛子. 『奄美群島の野生植物と栽培植物』（鹿児島大学生物多様性研究会編），198-207, 南方新社, 鹿児島.
- 山本宗立 2019. 唐辛子に旅して. 47 頁, 北斗書房, 東京.